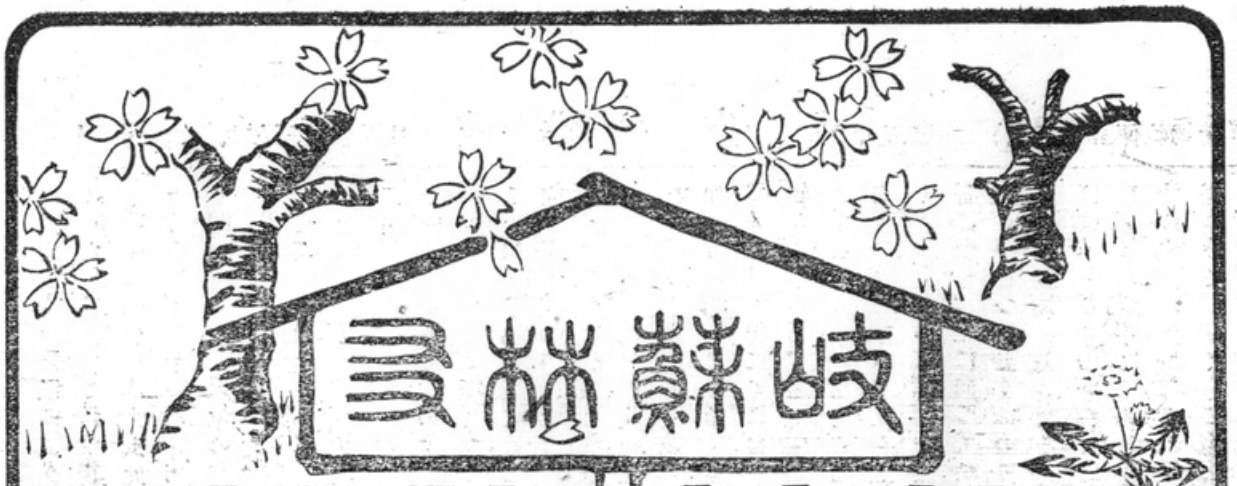
大正九年三月廿三日印刷
大正九年三月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地
編輯兼發行人 井上安正
長野縣松本市柳町八十五番地
印刷人 淺川藏吉
長野縣西筑摩郡福島町三八九番地
發行所 蘆澤書店

【定價金參錢】



岐蘇林友 第百廿五號 目次
空地利用と桐樹
琉球諸島に於ける森林植物の分布及其應用
朝鮮に於ける製炭事業に就て
山林雜感
暮行く寮の窓から
二月辯論會報
生徒諸君へ
學校便り
編輯部を去るに臨みて
文苑
七宮先生謝恩金領收報告
林友領收報告
林業いろは歌留多正誤以上

大正九年三月二十五日　第百廿五號　毎月廿五日定期發行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

空地利用と桐樹

西澤生

桐樹栽培なるものが、農家の副業として至極適當であることは、既に業に何人も唱導する所にして、余も亦之れに向つて大いに賛成する所である。然し余は必ずしも山腹傾斜地或は荒蕪地を開きて、桐樹林となすが如きは、一つの空地利用には相違なきも此の如き傾斜地荒蕪地は、何れの農家にも必ず之れを有するものでは無く、或る一部のものゝみに限られて居るのである。故に余の茲に述べんとする所謂空地利用とは決して斯る廣大なる面積を指すものでは無く何れの農家に於ても、苟くも一家を有し、何程かの土地を所有するものにありては、其の多少に拘らず、必ず幾分を有して居る所の僅々數坪乃至數十坪の空地を示すのである。又我國の農業は甚だ集約的なる所謂五反百姓であるから、土地の利用につきては、大いに注意を拂はなければならぬ、然るに吾農家は遺憾なく、之れを利用して居るかと云ふに、決して然かあらざるのであつて、或は生垣近き小屋の邊り、雜草の叢生に委し空しく害虫蛇蛙の巣窟となれ所、或は後庭の一隅何の利用するなく全く、空地となりて存するが如きを、吾人が往々見受ける所である。之れ即ち是等有害無用の雜草を除き、代ふるに利用の途として種々の植付をなすものあるが、余は桐樹を以てしたならば、經濟上より言ふも、亦庭前の風致上より見るも、衛生上より來るも、共に頗る宜しき手段にして、實に一舉兩得の策と言はざるを得ない、故に庭木として桐樹を栽培することは、是亦一の空地利用として最も適當なるものであると信ずる。以上に述べたることは所謂屋敷内に於ける空地利用であるが、尚序手に言はゞ其他に於ても少しく技術と手數とを費せば、利用し得べき所はいくらもある、即ち茶樹殼菽等の栽培しある畑地の周圍を利用して桐樹を植付くるが如きものである。勿論副作業であるから主産物の生育を害するが如きことあるは面白くないことである、故に其仕立法に注意し成るべく主作物に蔭影を與ふること肝要である。

是れを要するに、本邦農業の如く甚だ集約的の經營を爲すものに在りては、空地の利用と言ふことは頗る肝要なることにして仮令僅少の地積と雖も、之れを空地として放擲するが如きは不經濟の甚だしきものである。然るにも、拘らず、現下の農業は優に利用し得べき空地を存しながら、毫も是れを省みざるの有樣である。斯くの如き空地の利用としては、桐樹の植栽は費用勞力を要すること極めて少くして。而かも相當の收益を得ることの出來る至極適當のものであると信ずるを以て、少しく本樹仕立法の最も簡單にして、何人にも容易に行ることにつきて述ぶれば

分根造林法。分根によりて桐樹を繁殖するは頗る容易にして且つ其の生長亦早きが故に現今は桐苗には大抵此の法を用ふ。即ち十月下旬より十一月中旬の降霜前に於て、直徑五寸乃至一尺位の母樹を撰び。其の根本より一二間隔りたる所より、地面を堀り起し其の上根をさがし、漸次其れに沿ふて根を堀り出し、其の分根に適する根は直徑二寸以下小指大までのものにして、之を長さ四寸乃至七寸に切り、上部は平坦に下部は少しく斜に切斷したるものを、日に乾すこと數日即ち半乾として南面せる堤腹に横穴を穿ち其の内に立て、詰込み置き入口を塞ぎ翌春迄で貯藏し置き、或は家の軒下の所に一列に並べ、其の上に根を並べ土を覆ひ、斯くの如く互に相當積み置くも可なり、而かして翌春四月中旬に至れば、根は既に芽を生じ始むるを以て、之を損せざる樣に丁寧に採り出し、西日の當らざる地面特に東面或は南面の地を撰び、凡そ二尺五寸幅の畦を作り、一尺置きに頭部を上になして一寸程地面に出し、北に向つて斜に植へ土を覆ひて輕く押しつけ置くにあり、若し旱魃に際し土地の温氣を失ひたる時は、夕方に水を灌げは能く新芽の發育するものである。而かして其の新芽二三寸の高さに伸びたる頃、特に生長の良好なるもの一芽を殘し、他は掻き取る、斯くして梅雨前に馬糞、木灰、人尿若くは堆肥等を施すときは、其の年の秋には二尺より三尺の大さとなり、翌春は山出苗に供し得べし、尚二尺以下のものは一年間畑地に床替して後山出を可とする。

一定の土地に本植するには、秋季落葉後に苗木を堀り取り、其の根を五六寸の長さに切り込み、苗木を一所に集めて深目に假植し置き、翌春に至りて所定の土地に植出すべし、而かして苗を堀り取り採る際切り捨てたる根は又之を五六寸の長さに切りて、貯藏し、苗木繁殖の用に供するも得策と思ふ。植付本數は一反歩に六十乃至二百本を可とす、桐林を杉林などの如く、四五尺位に林立せしむるも到底良材を得ること能はず。

植付けたる翌春即ち發芽前或は、其の秋落葉後根本より二三寸上げて臺切をなすことあり、若し秋季臺切をなし各間切株の凍る恐れある地方にては臺木の上に三四寸土を盛り上げ置きて時を保存し、翌春發芽前に於て其の土を除き去るべし、臺切の後には數多の萠芽を生ずるを以て其の内發芽良好なるもの一本殘して、他を掻去るべし。此の際掻きとりたる萠芽は之を挿木になす時は生長して苗木を得べし、但し植付たる苗の生育良好なる時は、一回も臺切を行ふに及ばず、只多くの場合には成長惡しく又は屈曲せる場合にのみ臺切をなすのみなり。而かして生長を早くするには、梅雨前に干鰯、大豆、人糞、木灰、厩肥推肥或は落葉塵芥の類を施すを可とす。

桐樹には天牛虫の仔虫害をなすこと多し、所謂鐵砲虫と稱するもの是である、此のものは其の孔に鐵線を通して之を殺し、若くは擂俵にて幹を卷き、置き或は孔中を硫黛又は除虫菊にて燻すことあり、或は粘土又は味噌などには孔を埋め置きて窒息せしむることあり、或は石油（水に割りたるもの）重曹水を注入して虫を馳り出さしめて殺すも可なり又其の成虫は樹幹の下部に産卵するものなれば、常に注意し壓殺するも可なり。又桐樹天狗巣病と稱するもの一種の分生胞子によりて繁殖し、胞子は梅雨前後に於て發生し、雨及び風によりて軟弱なる嫩莖及び葉に傳染し葉は蒼白色を呈し、萎縮し、且つ短き技條を叢生し著しく生長力を感じ、遂に粘死するに至ることあり、之が豫防法としは新梢嫩葉にボルドー液を注ぎ病樹並に病葉は之を燒き棄て病樹の根邊には石灰硫黛花、又木灰汁を散布し切口にはヨールタール又は防腐劑を塗ること等あり、又桐の新條は冬期寒氣の爲めに枯死することあり、故に霜害の地方にありては

初年の間は其の梢二尺許りの間を藁にて包み、或は節をつけて切りたる竹筒を被らせ置くことあり、又新條は夏期皮燒けの害に罹ることあり、故に日當り强き所殊に西日の當る所には、幹の南西面に藁又は古莚など縛り付け置くを安全とす。（完）

琉球諸島に於ける森林植物の分布及び其應用

其四　沖縄國頭佐手　園原咲也

以上予は緒論として琉球孤島の地質氣象人文の發達林野一般林木分布の概觀を述べたれば是より各論として針葉樹類濶葉樹類竹及椰子樹類、羊齒類の四章凡そ百節に別ちて植物自然分科の順序に從ひ、叙述を試むべし、三好理學博士は往年南洋視察の歸途我琉球に立ちよられ如何にも可愛らしく熱帶的風光の顯はれた所だと感嘆せられたる由なるが琉球孤島の事物を觀察し來れば皆可憐ならざるものなし南北七百浬東西四百浬の、海洋上に點々其布する八十餘の島々二千年來の歷史を有し、幾多にローマンスに富める消長を有せる島王國の過去鄕土を熱愛する其住民泡盛に醉ひ鳥の如く歌ひ蝶の如く舞ふ、泰平の自然の民其一々の島々を訪ねん情風俗より自然の景觀も閲し來れば皆可憐ならざるものなし。

琉球植物の研究の興味も又、實に此可憐可愛らしき點にあり、而して予の此研究は實は素養なく師友なく、參考書なく公務及怠惰の爲餘暇なく、極めて低級にして非科學的なる可憐なる趣味たるに過ぎず、何等南島林業の向上進歩に貢献すべきを思ふものならず井蛙の見を大地に披瀝して敎へを乞はんとするのみ。

本孤島の植物觀察に就ては

暖熱兩帶より進入し相錯交せる植物の分布狀態

琉球孤島特産の植物の存在

移植植物の栽培及歸化現象

海岸的なる島嶼的なる生態的特徴

利用上特異なるものあること

等に注意せられんことを望むものなり。

第一章　針葉樹類

本孤島に産する針葉樹類は余りに多からず僅に四科　屬二十余種を數ふ可し

蘇鐵科ソデツ　公孫樹科　イチフ

松柏科　クロマツ、アカマツ、リウキウマツ、スギ、カウヤウザン、モミ、ツガ、トガサハラ、ヒノキ、サハラ、ビヤクシン、ハイビヤクシン、シマムロ、ハヒチズ、タカチゴヤウ

第一節　○○○ソデツ及イチウ

蘇鐵は本孤島の特産植物とも云ふ可く至る處に多量に存するもイチウは北部に僅に存するに過ぎずソデツは性狀利用等共に特殊なるもの多きを以て稍精しく論じ置く可し

一　盧鐵科

1、ソテツ　蘇鐵　鐵蕪　鳳尾蕉　cycas revoluta

○分布ソデツの原産地は、琉球臺灣南清方面なりと云ふものあるも、今より三百八十年前沖縄座間味島の人阿麻比屋なるもの、支那より移植し各地に蕃殖をいたすとあり蘇鐵の喰ひ始めとして、今より百八十年前余が居村國頭村字奥の宮城神畠なるもの、父の代より蘇鐵を邊土岬より移植し、救荒の爲蕃殖に入念しありしが、會享保の大飢饉あり、兩人ソデツを切りて隣村、各鄕に恤救し餓死を免れしむ、茲に於て此地方より苗木を分ちて、國頭郡各村に移植せしめたりとあり、是又にて蘇鐵の原産地を決定すること難きもソデツは山林地方に分布せず多く人家田畑に接近して存し人口稀なる宮古八重山屋久島其他無人島に少なきを見れば、原産地なるや否やに疑なき能はず、而も沖縄諸島にては、現時自然的に山野に播布繁殖されつゝあるは事實なり。

蘇鐵は本土に於て盆栽として珍重せられ予は幼時鄕里木曾にて見たることあり明治三十五年修學旅行の途次泉州堺妙國寺の有名なる大ソデツを大枚二錢を投つて見たり高さ七八尺のもの拾數本叢生せり渡來の由來を記憶せすと雖も堺は古へより外國貿易の要路たりし所呂宋助左工門の産地にして種子島の鐵砲も茲より傳りし由なれば舊時南方より移植せしものなる可し明治三十七年

種子島赴任の途次、鹿兒島高農林の馬車廻しの築山に、ソデツの盛植を以て飾られたるを見る聞く所によれば全校の演習林（肝屬郡手根村にあり大隅半島の南岸なり）には多數のソデツあり、中に高さ十四尺、枝亞口十餘、兒塊四千個を附ける大ソデツを存すと、島津氏は其領國の南岸地方に熱帶植物の移植を試みしもの、如く今日尙アカテツ、レイシ、リユウガン、ゴムノキ、ヘツカニガキの如き、熱帶植物を此地方に見るべければ、恐らく琉球方面より移植せしものならんか、種子島に至れば屋敷林田畑の畦畔路傍等至る處に野生的に繁茂せるソデツを見、離島馬毛島には、數十町歩に亘るソデツ系あり、此種子安尾庄司浦は、舊藩時貿易船の船頭を、出だせし所にて、琉球踊等存する所あるが、茲の孝子彌五郎の遺跡に高さ三間周圍五尺位の大蘇鐵四本簇立し偉觀を呈せり、中種子村堺の鄕社内にも、高さ三四間中央に多數の枝を分岐せる大ソデツあり、又盆栽として鉢植せるもの民家に見ざるなく多きは數十鉢を貯ふる人すらあり、漸くソデツ國となり來れり大正元年大島本島の海岸を横ぎるに、本土の靜岡に於ける茶園、紀州に於ける柑橘園の如くソデツ園の多きを見たり、沖縄本島及其附屬諸島に入れば、更に一層多くの蘇鐵を見る事前述の如く、傾斜地の畑地に階段的に列植し土砂杆止の要に供へる所多し、

ソデツの性狀　蘇鐵類は木生羊齒、木賊類と共に、前世紀に於て盛に繁茂せしものにて、現代のものは其遺品とも見る可く、他の植物とは大に其趣を異にして、珍奇なる性狀を有せり、莖は柱狀にして中央に大なる髓あり、周圍に測立維管束をなし葉は莖頂に輪生す、尋常葉は羽狀旗葉にして、濃綠色を呈し、滑澤長さ二尺乃至六尺に達し此間に鱗狀葉を交ゆ、葉身枯落するも葉脚は永く殘着し、内部には澱粉を含み外部はコルク化してクキを保護す、澱紛は髓及維管束内何れにも含有す、又新芽及葉脚間には褐色の錦毛有せり、莖を傷くればゴム狀の粘液を分泌す

花は雌雄異株にして、六七月頃莖頂に開く雄花は柱狀をなし高さ二三尺、多數の箭形の雄蕋を輪生し、下部に苞胞を着く、其生殖細胞は隱花植物に於けるが如く、精虫にして纖毛を有す、此は鹿兒島に於て池野成一郎氏の發見せる處として著名なり、雌花は莖頂に毛茸に富める實葉群を簇生し、胚珠は基部は數箇宛裸生す、實は十月頃熟す扁平小鷄卵大にして、外種皮は朱色を存し滑澤なり、中種皮は黄褐色一分位の軟質をなし、内種皮は果穀なり、穀を割れば澱粉に富める仁を有す（内外牛種皮の語は予の創造なり適語承りたし）

ソデツは性强健にして、瘠惡乾燥に耐へ、岩石地砂地林木の庇蔭等にもよく生育し、潮風等に對する抵抗も又强し、實によりて人工的にも、自然的にも、繁殖し得べしと雖も、根元及莖の中間より多數の分蘖をなすを以て、是をとりて移植し增殖するを普通とす、ソデツの根に綠色を帶べる瘤狀の塊附着す、恐らく其生細菌塊ゐらざるやを思ふも明ならず、近時鹿兒島高農教授吉村尙清氏は、ソデツは空氣中より、游離窒素を吸收する由を發表せりと、沖縄にても蘇鐵原を開墾すれば作物豐饒なりと言ひ、又ソデツの新芽を肥料に用ひつゝあり。

ソデツの効用　本土に於てはソデツは觀賞品に過ぎざるも種子島にては既に田畑の畦畔に防風林的に植ゆるものあり、救荒の備畜と稱し居るも未だ食用の例を見ず、實あり澱粉をとりて用ゐるものあるを聞くに過ぎず、葉は近時海外輸出の目的を以て、多數採取されしことあり、觀賞用として全島の人白井某は帆船數艘に大小の蘇鐵を島外に移出せしことあり

大島諸島のことは知らず、沖縄諸島にては食用として年々用ゆる所あり、予の居村國頭村及大種子の利用に關して、予は巡回中字奥（蘇鐵の喰ひ始めの地）に一泊し、其處の老婆より一話を得たり、蘇鐵の莖は神里宮城以來食用に供せし處なるが未だ實の利用を知らず老婆七八才の頃（今より六十余年前）

山に薪取りに行き、會々ソデツの實を見つけ。美しきものとて、數十個持參し是を祖母に見せしに、是は蘇鐵の如く食用に供し得べけん予は老ひたり生を失ふも惜しからず試食して恚なくば用ゆ可しとて、實を割り仁肉を出し水につけ粉に碎き粥にして喰べるに味美しく何等異狀なきまゝ、皆々是にならひて食用に供する樣になれりと

ソデツの効用を表示すれば左の如し

薪炭　沖縄本島の南部の如き薪炭に乏しき地方は重用なるものなり

葉
- 裝飾　米、佛、西等にて戰捷草なる棗椰子の代用とする由にて海外に輸出
- 編物　帽子、莚、籠の類を編みしこと
- 雜用　あり　箒、日蔽、菜園の垣、綿吧に用ゆ

直接
- 切干
  - 髓部　養食（製粉して團子を作る）
  - 莖部　又は（澱粉を採取する）
  - 葉脚　養食及び麴をつけて味噌を作る物干は一旦水に浸し土間に堆積して醱酵せしめて利用す

實
- 生品
  - 澱粉をとる
    - 食用に供す
    - 衣服の糊として賞用す
  - 澱粉糊……豚の飼料となる麴をつけ味噌を作る
- 仁肉
  - 澱粉をとる
  - 碎きて製粉す
  - 全体を藥用とす

綿毛　毛毬の心とすよく跳躍すと言ふ

種皮　外種皮の赤褐色肉を藥用に供する由

觀賞　一庭木築山等に植ゆ　一盆栽細くして枝多きもの又は奇形のものを用ふ

間接
- 生垣、防風、防潮樹として家屋の周圍田畑の畦畔に植ゆ
- 土地改良　瘠惡地を肥沃ならしむ爲め
- 土砂杆止　傾斜地に段畑を作り水平の方向に列植して土砂の流出を防ぐ

舊時蘇鐵酒ありし由なるも今は聞かず

本孤島に於ける蘇鐵の播布面積は、概測なれ共一万町歩を下らざるべし、ソデツに内乾燥品一升の價格は、貳拾錢乃至參拾錢、ソデツ剝皮莖百斤の相場參拾錢乃至五拾錢にしてソデツ十斤より一斤内外の澱粉を製すべく一斤の澱粉は貳拾錢乃至參拾錢に取引せらるべし

沖縄にては飢饉のことをソデツの世と云ひ飢饉の時ならでは用ゆる事一般に稀なるも前述の如く我國頭村及大宜味村にては毎年三月より五月六月の間ソデツを利用し食用するもの多し。ソデツの利用多く普及せざるは時に中毒する事あり、其の害猛烈にして一家全滅の如き實例あり、未だ此の點に關し學的の研究あるを聞かざるす高農教授吉村氏等により近く闡明せられ本植物の利用に一新紀元を劃するの時あるを信ず、實際に於て此の被害は切干の製法不充分なるより、一種のアルカロイドの生成せらるゝものゝ如く、清流ある地方にては此の害を被るもの少なし、此は水にて精製せらるべく又實皮生莖より直接取りたる澱粉に害せらるゝことなし

而して既に品種の撰ばれて植えらるゝ事實あり、雌莖のみ保護繁殖し實の收穫を期するものあり、食料問題喧しき今日、ソデツをして南島重用作物の一に加へしめ、西穀米に比す可き入工米の產出せらるゝの時あるを思ひ、此は實に南隔の學府鹿兒島高等農林學校の一事業たるべし

ソデツに關しては特に全校に在學せらるゝ家高君の御周旋を以て全校研究の詳細を承知し度きものなり

二公孫樹科

又いてふ、銀杏、公孫樹、ginkgobiloba. L.、本植物も亦前世紀の遺物として知られ現世には支那及日本朝鮮に存ず原產地はヒマラヤ地方ならんと言へり

元來溫帶地方の生育に適するものならん陸奥陸前武藏等に多く九州にては熊本市に多く熊本城は一名銀杏城の名あり自生的に繁殖せず凡て移植せられ神社佛閣等に巨木を見近時市街の並木として賞用せらる琉球孤島にては余は種子島にて數本を見しのみ開花結實し生育し佳良なるも沖縄本島の南部に植えしものは至つて生育惡しく盆栽的樹形になり行けり恐らく琉球孤島の北部を以て栽植の限異と見る可けんか實は食用に供し材は各種の用途に供す可く庭園等行道樹としても風致あり北部には大に栽植を希望る材種なりす

朝鮮に於ける製炭事業に就て

金南一　任矢生

緒言

人智の開發と社會の進歩とは全世界をして如何なる程度まで開發せしむべきや計り知るべくもあらず竈の灰を取り平たき石を之に埋めて暖を採りしは遠き昔にあらず其後製炭の方法發明せられて以來最も廣く採暖煮熟に用ひられ來りしが近來に至りては石炭を用ふるに至り蒸氣となり瓦斯となり文明の都市には瓦斯會社の設置せらるゝもの多く燈用の外ストーブ用として瓦斯を供給す。然りと雖も瓦斯蒸氣の如きは其價低からず現今の之等を用ひつゝあるは大都市の貴顯富豪の而も一部分にして其普遍的にして且最も多く用ひらるゝは木炭なり。今木炭需供の狀況を述べんに朝鮮全道に於ける統計の見るべきものなく從て敷字的に之れを掲ぐる能はざるを遺憾とす。故に京城一都市の需要狀況を述べ以て全道の需要高の如何を窺がはんとす順序として現在京城府の戸數を示せば左の如し

戸數　五八、〇八二戸

内地人　一七、六九九戸
朝鮮人　三九、八二三戸
外國人　五六〇戸

人口　二四六、〇六八人

内地人　六〇、〇三〇人
朝鮮人　一八三、八六六人
外國人　二、一七二人

今京城府に於ける内地人のみの需用高を算するに其の一戸の使用高を極めて控へ目に見て平均一ヶ月二俵とす然るときは一ヶ年二十四俵にして全戸數一ヶ年の需要高四十二萬四千七百七十六俵を算すべく一俵の價格六拾錢（五貫目入）とせば實に二十五万四千八百六拾五圓六拾錢の巨額に上るべし木炭を使用するは獨り内地人のみならず近來鮮人側にも多く用ひらるゝに至り且其需用地は近く仁川あり開城あり水原あり而も年々入口の増加著しきものあるに於ておやゝて之れが供給の狀況を聞くに其生産地たりし黄海道は年々過度の産出を計りし結果原料欠乏し今後産出の餘裕幾干もなしと聞く然し今後は主として之れを江原道方面に仰がざるべからず今左に江原道方面に於ける木炭一ヶ年の産出高を驛別に示せば左の如し

驛名	俵數	備考
福溪	一二〇、〇〇〇	五貫目入とす
劒拂浪	六〇、〇〇〇	
洗浦	三〇、〇〇〇	
平原	三〇、〇〇〇	
太光里	三〇、〇〇〇	
鐵原	一二、〇〇〇	
計	二八二、〇〇〇	

以上の如くにして其他の驛及漢口に依り搬出するものありとするも其總俵數三十万俵を出でず京城内一都市内地人の需用にすら應ずる能はざるものとす。而して江原道方面より産出する木炭の原料は主として國有林の拂下亦容易ならず原料次第に欠乏し需要愈増加するを如何にせん若し之を再び高價なる内地産木炭を求むるに至らんか木炭を以て米に次ぐ日用必需品とせば其の價格騰貴は引きて生活上に困難を來すや火を見るよりも明かなり

夫れ製炭の事業たる有望多利なるのみならず眞に朝鮮に於ける國益の事業と云はざるべからず夙に思ふに暇を盗みて調査したる江原道方面に於ける現今木炭製造搬出の狀況を述べんとす

沿革

本道製炭業の沿革は詳かならずと雖も今より十七年前鐵原郡金鶴山に於て製炭し同道内居住の内地人に供給せしを嚆矢となすと傳へられ然れ共春川地方に於ては或は其れ以前に製造し京城へ搬出せしものあるかに聞け共詳かならず本道が木炭の産地となりしは實に大正三年京元線開通以後のことに屬し鐵道の開通後格段の發達をなしたるものと聞く

原料

檜柏等の堅木の古木を主とす而して本道鐵道線中福溪劒拂浪洗浦等の主産地に於けるものは殆ど國有林拂下の檜類を撰伐し原料となし來たりしもの最も多く民有に於ける製炭業は極めて少く之れ民有地は立木に乏しく原野の狀態にあればなり

製炭法

製炭法に於ては總べて石窯を以てし窯外に於て消化するものにして内地の白炭法に類するものなりとす然れ共築窯並に製炭の方法極めて幼稚にして殆ど研究する價値なしと雖も參考のため其の大体に就いて述ぶれば次の如し

A 築窯法

先づ炭材の求め易可く成赤粘土地を撰み縦徑八尺横徑六尺の楕圓形を地表に畫き劃線の外圍に厚き約一尺五寸乃至二尺を以て石垣を築く（赤土を石の間に詰め込む）而して其の一方稍尖りたる下部を窯口として横二尺高一尺五寸だけ開きおき又反對の腰底よりは煙出を石にて築くことは内地のと同じにして竈に竈口より炭材を入るものと竈の上部約三尺の穴を設け之より入るものとの二種あり

B 燒方

炭材即ち檜柏（シラカンバ等も用ふ）等の古木を根切りし後長さ二尺乃至五尺に切斷す而して胴木は適宜に小割し枝は直徑四寸位のものまでは其の儘用ふ而して築竈後第一回即ち燒初めの際は右薪材を縦列し其の上に枝條を横列して穹窿形となし更に蕨を以て覆ひ赤土にて其の土を塗ること内地の製炭法に同じにて築竈終りて後竈口にて焚火すれば火は炭材に點ずるに依り充分に點火したる時燒出を閉づ右炭火は朝に於てなし翌朝に至り灼熱せる木炭を竈口より掻き出し灰と土との混合したるものを覆ひて消化す第二日目は竈内に尚閃光の有する頃を見計ひ再び炭材を結めて前同樣焚火す前述の製炭方法によるものは一竈より約木炭二十貫を産出するものにして燒男一人を以て實行する即ち朝に竈内の木炭を掻き出して消火し直ちに前日拵へ置きたる炭材を詰込みて焚火し置き直ちに翌日の炭材拵へに從事す一日を以て一炭分を拵へ竈際まで運搬し置きて歸家す。斯く繰り返して年中閑なく製炭に從事するものとす

製炭用器具

朝鮮人は從來鋸を用ふる事拙劣なり。製炭の際に於ても其主たる伐採具は斧とす、普通に用ふる製炭器具を列記すれば

一、斧　一チダ　一鎌　一掻出し具
一灰掛け具

俵裝の寸法

俵裝は萱製角俵正味十貫匁入とす、俵は萱を以て製し横二ヶ所折目二ヶ所即ち四ヶ所を葛蔓を以て編み尤も其風袋一貫目とす

氣法

人間利恰になり欲望も愈々大となり各人は自己の欲望を滿足せしめんが爲に世にあらゆる工業家は製品に改良を加へ顧客を引き自己の欲望を滿足せしむる事に汲々たる、茲に於てか？激烈なる競爭となり勝者を生み敗者を出す品質の善良を要する事言を俟たずと雖も表面の美を以て競走に勝利者たらん事を計るは愚なり須らく價格の低廉を以て立たざるべからず之れ智者の業にして功と成すの鐵路と云はざるべからず

畢竟今日の製造界は生産費の競爭にして生産費を節減せんとするは製造方法に改良を加へざるべからず原料材料を安價に求むる方法を講ぜざるべからず、製炭事業亦此理に漏れず需要多き故を以て從來の製法に甘んずべきにあらず、見よ去年鬱蒼たりし森林は今日は禿山に等しき有樣を呈せしにあらずや、原料不足は目前にして生産費競爭の大敗北たるを如何にせん。茲に於てか同業者たる者目前の利に走るを止め一方植樹を奬勵して原料の充實を期し一方現在の原料として最も有利に使用を講ぜざるべからず、製炭法の改良は後者に叫ぶべきものたるを信ず從來の製炭法に依るときは原料に對する産出高一割一二分なりと云ふ檜等の堅木にあらざれば不可なりと云ふ、現今の勢を以てせんか茲五六年にして原料は盡くるに至らん、故に從來の白炭法を改良し黒炭法即ち竈内火消法に依らざるべからず此方法に依る時は約二割五分の木炭を得べく且つ楓　シラカンバ　ニセアカシヤ　ポプラ　迄も原料として得べし、仝業者たるもの目前の利に汲々たるを止め茲に顧みて一日も早く改良し白他共に利益を増進せん事に努めざるべからず

山林雜感

蘇山樵夫

我信州は、實に本土の脊梁に位し、山嶽を以て天下に鳴る。從て我信人は、其の雄大莊嚴侵すべからざる感化を受くること甚大なり。山以高爲貴。古人果して我を欺かず然れども夫の神社佛閣を見よ。各景勝の地を占め、更に大樹を以て殿堂を點綴し、而して益々其の神聖莊嚴を加ふるにあらずや山嶽高峻雲霧を凌ぎ、更に之を覆ふに欝たる森林を以てせば、其の雄大莊嚴の幾層倍加するを知るべからず。故に吾人は以爲く山以高而有樹爲貴と。

朝な夕な眞木のしけれるやま〳〵に
雲のかゝれるさまそををしき

□

高山峻嶽、固田圃を開拓すべきにあらずと雖も、亦決して之を赤裸に委すべきにあらず。之に森林を造成して利用厚生に資するは、經世家の看過せざる所。若し夫れ森林と國土保存の關係、氣候の調節、水源の涵養、木材の供給等の如きは、今更に吾人の呶々を要せざるなり。

山といふ山のたふとさ見てもしれ
眞木のしけれる木曾のみやまを

□

木曾御料林が木曾連亙の山脈を覆ひて一欝茂畫尙闇く、其の木材の供給や、將來實に無盡藏と稱す。其の今日帝室唯一の世傳御料たるのみならず、源泉を此の森林に發して混々晝夜を舍てざる木曾川の水力をして、文明社會に寄與せしむるを見て、誰か嘆美せざる者あらんや。而して其の茲に至りたる歴史を探究して、山村氏の私領を辭し、尾藩制度の下に寛嚴宜を失はず。能く保護の實績を擧げ來りたる歴代の淸廉純忠に一顧を與へざるは、抑何事ぞ。

みゝ林につくせしきみかいさをしは
木曾のかれとなりてたえせし

□

我山林學校は、巍峨たる山嶽の中、而も如上の歴史を有する御料林の裏に創立せられ全國より集り來れる學生に、人爲の敎育と自然の感化を與へて、殆んと一千に近き卒業生を出し、以て斯界に貢獻したる其の成績や、實に顯著なりと謂つへし。然れども素是れ叢爾たる一小校のみ。更に大に之を擴張して、斯界の急需に應せざるべからず例年木縣會に於て國立移管の建議を爲し來れる幾回ぞ。來年度に於て一學級を增設せんとする亦可ならずとせず。然れども百尺竿頭一歩を進めて、速進の方案を諜すること緊要ならずや。識者の考慮を望むや切なり。

みゝ林のおくにまちけしまなひやは
國のかためのもとゐとぞしれ

□

山林學校幾多の卒業生、今や全國に散布して、北は樺太の野に、南は臺灣並に朝鮮の山に、將滿外各地に及ぼして、各種方面に活動しつゝあるは喜ふべしと雖も、然れども更に一層の奮勵を囑望せざるべからざるものあり。蓋し世人の山林に對する覺醒を促し、以て母校に對する同情を博する所以なればなり。山嶽の感化と林業の性質上より來る感化とは、自ら卒生の人格上に發現せざるべからざるのみならず、山村氏の遺したる偉大の敎訓は、日夕模範として忘却すべからざるものたり。至囑々々

まこゝろの程そそのまゝあらはる、
うゝるはやしの木々のさかえに

□

植林の事業たる、其の効果は決して一二年の短日月にして奏すべきにあらず。故に所謂近眼者流の到底成し得る所にあらざるなり。我木曾各町村に於ける恩賜記念林の如き、固是れ聖旨に奉答せんが爲に出つと雖も、亦一般斯業の範たらずんはあらず。開拓の効なき山野を私有する者と共有する者に論なく、徒に之を荒蕪に委せず。積極的に植林の事業を計畫施設して、以て他年大に國家の需用に應し得るの準備をなすべきなり。

うえおかは苗木もいつか雲つかん
ゆくすゑなかくまつこゝろかな

□

米價の暴騰は、實に天井不知の狀態を呈し一面多穫の計畫をなすと共に、他面節米の宣傳を要するに至れり。木材豈然らざらんや、近年私有林濫伐の結果は、山嶽の雄大莊嚴を欠如するのみならず。木材の不足に

よりて價格の騰貴米穀も啻ならず。其の有形無形の損失決して鮮少ならざるなり。我木曾の如き、始めて此の山間を踏破する者は、山嶽の禿と材價の高に一驚を喫せざるものなし。吾人是に於てか一面消極的の節木宣傳を叫ばんと欲ず。

うえてきりきりてはうゝる柚山の
柚木すくなくなるうゝれたき

□

家屋建築法は、漸次改良に向ひ、不燃質材料を以て屋根を葺き、粘土を以て壁を塗り土塀生墻を以て板塀木柵に代へんとす、蓋し火災豫防の趣旨に出つと雖も、一面節木の趣旨によりて、大に之を奬勵普及せしめんことを要す、燃料の如きも、木葉木屑古新聞紙稻藁等は勿論、更に進て瓦斯電氣を用ひ、竈煖房器等の改良亦漸く行はれんとするは喜ふべし、要は、一枝一葉も苟もせず片木尊重の氣風を養成し、以て大に多方面に節木の方途を講ずべきなり。

ことくにの馬のくそすもたくきかは
まつのひとはもこゝろせしやは

暮れ行く寮の窓から
灰色に曇つた空、うら寒い日光、寒氣を含んだ空氣――如月も最う後殘り少なとなつた今日此の頃四邊が黃昏の幕に閉される時分に寮の小窓につと身を寄せて四圍を眺めた。駒ヶ岳頂上の白雪には太陽の餘光が輝いて居た。

木曾へ木曾へと皆行きたがるヨウとのんびりとした馬子唄が暮れて行く尺余の行途の凛とした空氣を慄ひ漂うて流れた山の樣に材木を積んだ荷馬車が七八臺ガタガタと重苦しさうな音響を立て、行き過ぎた……と忽ち最後の馬車がピタリと停止した。

こん畜生と馬を怒鳴る聲、ピシリと手綱で馬を打つ音……馬は再び動き出した此處にも生活難の兆が潛んでゐた彼等は斯して毎日〳〵パンを得る爲に汗水を流して否膏を絞つて曉から夜迄孜孜として蟻群の樣に働くんだ若し一日でもサボッタならば彼等は餓に泣くに違ひない天幸に陛下の赤子をして餓ゑしむる勿れ。

北寮の二階は實際に悠長だインザースカイの方からふつくらと林檎の樣な頰に情を含んだ少女が前の街道へ浮き出して來た實際鳥羽繪から拔け出した樣な美麗な木曾美人が。

それも宵の……室長會に呼びつけられて叱られた時只獨りこつそりと自習机を離れて溢れ出る涙をこらへかね寮の窓に寄り添うて父母ゐます彼方の空を抑ぎては人知れず共同生活のつらさを歎息して袖を濡らせし事も幾何であらう。

又持ち馴れぬ鍬を振り上げては汗を全身にしぼせ大きな石を擔つては肩の痛を覺ゑ土篩をして手に豆を出來したり、嗅ひアムモニヤの臭を嗅ひだりするのがつらさに實習の勞苦に堪へ兼ねて戀しき生みの里を望んでは懷しき母や姉を慕ひし事も幾夜であらう。

かく過ぎ來し方の夢の跡を追想して居るときにほろほろと冷やかな夕風がほてつた頰を撫でて吹き過ぎた駒ヶ岳山巓の白雪に光て居つた太陽の餘光は何時しか落ちて了つて折しも鳥が只一羽默然と夕暮を告げ渡る神使の如くに西の空から東の空へ闇を縫うて消え失せた見上げると東の空にも西の空にも友ゐます彼方の空にも希望に滿ちたる少女の凉しい瞳の樣に情愛に富んだ樣な星が疎らに瞬いてゐた。

節分の夜は例年通り鬼（於仁）も隨分迫つた迫つた學年末とも思はなかつた。

× × × ×

あゝ、夜が來たんだ寮の十燭の電燈がサボッタ樣な光りを投げて輝いて居る神は眠りの爲に吾人に夜を與ゑたのである或詩人は夜は眠りの爲に造られたる物にあらずと實際狂氣じみた事を云つて居る。

兎に角夜が來た慰安の夜が現出した雄大な駒ヶ岳は木曾と伊那との境界に日進月歩と共に蔓る文明開化の狂暴を恐れたのか勞動者は寂しき賤が家に將來の繁榮を豫想してか暗の中に籠められる。木曾美人も父母の家で暖かい布團に包まれ乍ら金殿玉樓を憧れ、鳥は森の梢で三千年の昔神武天皇の四道平定に際し山又山の寂地で進路を失せし

時道案内をせし功勞を思ひ起されるのである。斯うして吾人は火の氣の無い樣な寮の十六疊の間で煎餅布團に包れ乍ら未來は林學博士や農商務大臣を希望しつゝ、慈愛想愛と博愛に富みたる女神の眸子の樣な星に夢を守らせてそれ〳〵思ひ思ひの慰安を採つて華胄の國に入るのだ。

二、二七　小波子

二月辯論會報

四時變りなきは木曾川の流れ駒ヶ岳の夕照なり、然るに人生や變轉極りなく、朝に紅顏の少年、夕べに白骨と化す、嗚呼敢果なきは人生？短なるは歲月なり、是々月日の小車は、おやみなく廻り廻りて、本學年末とはなりぬ、未だ余寒去りやらず、裏山演習林に寒風吹き荒ふ、二月二十六日、吾が校友會は本年度掉尾、大辯論會を開催し併せて來學年度校友會各部部長選擧行はる本日壇上にて熱辯を振ひし諸君の、芳名を記し聊か妄評を加へん

◎會開の辭　部長

◎思ふまにまに　一年　稻積狷介君

精出せば凍る間もなし水車……人絶えず活動する所に滯りなし、と云ふが如き口調にて思ふまに〳〵快辯を奮ふ

◎須らく向上に勉めよ　二年　長谷川要治君

「ヒヨロ〳〵長い此の長谷川が壇上に立ちては、而も熱心誠意…吾が正也義なりと、信せし言はあくまで發表せん」と自稱せりスルト反りたるスタイルや良し、落ち凹みし眼玉！　眼鏡越に度々光れり、登壇する事や已に三回吾が部の爲熱心なる君に對し深く感謝す

◎勇氣　一年　大井吉日兒君

西瓜の如き丸き顏！　赤味を帶びし君の頰愛嬌有りしど雖も吾聲低ふして獨語するが如く演題に掲げし勇氣を解かんとするはちと困難には非ずや

◎輪回轉生　二年　柳澤虎三君

君の壇上に上るや「アーメン」「あゝ天に在す神よ」等と所々急霰の如きやじの聲起れり。聽者漸く靜まるに及びて大自然を解く莊嚴なる森林よ！偉大なる夜の大空よ！あゝ其の物に接し生する念こそ神なり、靈なり、と說きて一歩々々エスに近づかしむる所に君が論法の妙有り

◎大和魂の本領　一年　奥原鎌次郎君

聽者のやゝに會ふや長い頭を前後左右と振り立つるは滑稽なり「死は鴻毛の輕きに比し義は大山の重きに比す」と說く、君は初陣ならん。益々修練あれ

◎ベストを盡せ　三年　村上道信君

偉大なるかな君の体軀！　良く人を呑むの慨あり、然れ共惜しむらくは其の音聲の透徹せざるを、論ずる所、簡單而も要を得たり

◎須らく現代を理解すべし　三年　深澤佐愛君

君の壇上に上らんとするや「君の說が久しぶりにて聞ける」と所々聲有り、元來老練なる口調にて淳々、長時間に渡りて說く親の子を愛する、先生の生徒を愛する、此等皆理解にしてお互相愛し合ふも亦理解なりと云へる時、如何なる意味の含まれ居りしにや一同哄笑せり、君にしてより以上の活氣を有しなば言々句々人を感動せしむるならんに

◎飛入　三年　椙山節男君

「六尺の男が久しぶりで壇上に現はれました」と劈頭自稱するや諸君！　吾々余す所一ヶ月ならずして社會に出ずるの秋は來れり…と角刈り頭をしきりと振り立て悠々壇を下れり

◎拳を固めよ　三年　小縣球次君

登壇するや熱心誠意―今や流行の舶來志想は滔々として吾國に押しよせ來れり、覺めよ諸君――緊張すべき秋にこそ拳固を振り示す、君の三寸の舌鋒や鋭く、誠意良く聽者を動かす、已にして此れが兄の最後の辯論なりしか、一ヶ年間吾が副部長として努力されし勞を謝す

◎人道主義の敎育　一年　小畑榮一君

聽者を正視せず側方に面を向け論ずるは君の短所ならん、其の意味の徹底せざりしは元氣なかりしが爲か益修養あれ

◎新らしい芽　二年　村松一郎君

來るべき新學期に際しては、吾々新らしき

芽を崩ざし互に手を取り合ふて努方せんと順を追ふて說く所、意味深淵にして而も要を得たるは感服の外なし、君よ今少々上体を反らし論じなば一層堂々たらん

◎人間の價値　菊地　先生

胸力貧弱なれば其の人價値なき者の如く蔑視せられ一般社會は其の眞を省みずして單に其の人をのみ侮蔑するは殘酷なり、良く全力を盡す奮鬪の人こそ價値ある人ならずやと說く所淳々として淀まず、二百の生徒をして同感と叫ばしむ、吾が部のため益御助力あらん事を乞ふ

◎偶感　三年　高橋秀惣君

着實なる君の態度――順を追ふて一歩々々枚風を說く、曰く防火準備――校旗の所在敎員養生所の設置――と滔々迫らず、悠然而も熱誠なるは齊しく余等の感歡する所なり

◎樂地　田中　先生

表情に富んだ先生の態度――「頑にして偶なり」と「僕は神州男兒の生きた標本ではあるまいか」と流暢なる音聲によりて滔々述べられ聽者をして悉く敬服せしめたり

◎偶感　三年　遠山虎雄君

先づ壇上に現はるゝや生徒の自重すべき事及び當校の內容充實を計るべき事の必要を論せられ後本校と西筑摩敎育會との關係につき愼重なる態度にて述べられ席を後辨士に讓れり

◎過去三ヶ年を顧みて　千田端穗君

一度君が壇上に現はるゝや々々朗々として玉を轉ばす如き美聲に忽ち熱烈火を吐きて、本校の上に及び其熱誠を絶叫するや聽者皆感大奮激勵呼應せざるものなし悠々として迫らす其の說く所明快なるは唯感心の外なし君の一ヶ年間本部の部長として熱心御盡力下されし勞を萬謝す

◎偶感　三年　長崎信一君

健全なる精神は健全なる身体に宿ると喝破し其鐵石の心轉々本校現今の狀態に及び今後の方針を指示す明論人々をして暗夜に燈火を得たるが如し君も亦慷慨家の一人なり

◎開會の辭　副部長　小縣球次君

妄評を謝す　一部員

生徒諸君へ

拜啓

嚴寒の候諸君益々御健祥にて學業に御勉勵の段慶賀の至りに御座候陳者小生其其後無事書は時に或は一望千里際涯なき荒野を時に或は薊蓊たる針濶の密林中を東奔西走致し夜は煤烟と塵埃とにて濛々たる支那宿或は柿夫小屋に毛布を被り一盃の支那燒酎に勇氣を鼓舞し辛じて喃柯の一夢を貪り居り申候去る二月五日より仝十日迄六日間例の馬賊の巢窟として知られたる壯丹嶺を縱斷横走致し候も幸に別條なく一先づ終結を告げ申し候明日は我々國民として尤も目出度き紀念の佳節に相當致し候間附近より豚や鷄を徵發し祝盃を傾け君國の爲萬歲を三唱し聊か祝意を表する覺悟に御座候

此の紙面御手許に到達する頃は諸君の收獲時なる學年試驗準備に忙殺せられつゝある時と存じ候夫に物は決して成る日のに成るに非ざる故諸君從來の奮勵努力の結果必ずや美果を收獲するに至るべきは深く信じて疑はざる處に有之候併し美果を手にする迄は秋毫も御油斷無き樣願上候殊に三年生諸君に於ては一層の御自愛を祈る次第に御座候、今後は彼の支那と界の白頭山麓を通り三月下旬か四月初旬に歸舍の豫定に御座候實は卒業式の祝辭を打電致し度所存に有之候も電報の便なきは勿論郵便にて長春迄普通二週間を要す僻地に有之加之丁度卒業式に間に合ふ處にて郵便を出し得るや否やは全く不明に有之候間少々早手廻しの感あつて誠に御申譯無之候へども本日寸暇を利用し近況を御通知旁々諸君の御健康を祈り候以て卒業式の祝辭を呈し度き微意に有之候間事情御諒察相成度候　匆々敬具

二月十日　壯丹嶺麓大滿紫河にて　七宮生

生徒諸君

學校便り

○前七宮本校長客年十一月退職せられたる後暫時の間缺員なりし本校々長は今獲福部喜平氏に任命せられたり仝氏は明治三十一年東京帝國大學農科大學林學科卒業後林務

官補として高知大林區署に赴任せられ引續き仝三十二年秋田大林區署技師仝三十四年山林局技師三十六年高知大林區署技師三十九年仝大林區署林業課長四十三年農商務技師大正三年鹿兒島大林區署技師林業課長大正七年東京大林區署技師に歴任大正八年六月病氣の爲め官を辭され今般本校に赴任せらる正五位勳五等に叙せられ我國林業界に御貢献少からず斯の如き良校長を本校に迎へしは誠に光榮欣喜の至に堪えざる所なり

○今般前沼田書記の後任として勝野廣次郎氏本校書記に任命せられ八級俸を給せらる

○大正九年後期試驗三月十二日開始仝月二十日終り仝月二十六日卒業式の豫定なり

編輯部を去るに臨みて

春風凍雲を拂ひて暖氣山河に溢れ白花の咲き初むるも程遠からざる好時節と相成申候處、校友會諸兄益々御多祥の段奉大賀候

降て不肖等本誌編輯の大任を拜命致し大なる抱負を持して立ち候得共、元より淺才碌々として何等貢献する所もなく、茲に過去一年を顧みて只々不堪慚愧候。然るに諸兄には金編玉稿を雨下せられ候ため、洵極的にも大任をつくし得たるは之全く諸先生及諸兄等の熱誠なる御援助の致す所と深く感謝致し候、茲に生等本部を去るに臨み缺陷多き一年を顧みて慚愧に不堪諸兄に謝答し併せて本誌に對し將來益々御情誼を垂れ給はん事を冀望致す次第に候

副部長　立道乙松
正部長　深澤佐愛

文苑

桟うつ人

○小夜更けてしゞまにかへる天地はおぼろにきこゆ雪崩の音の

○淋しさの堪へ難くして口笛にまぎらす癖のつけるこのごろ

○駒ヶ岳月下に沈む山峽を瀧車通りたり夜の更けたり

○宿直する夜半の風さへ西戸打つ音のひびきて心臓の高鳴る

○まばらにも山腹に立てる松林月白うしてさやかに見ゆる

○友もなく戀もなければたまさかの人の訪れもてなしもする

○構内の夜警の度に我心驚きはゞむおのが足音

○陽の光やはらにさせる雪しめり雀ま近く囀り歌ふ

○しめやかに春雨ふりて停車場の瀧笛の音のかすかに胸に

○かげろひの山脈の上に立つ見えて梅の一本ましろに浮ぶ

○のたまくる師のみ言葉のうれしみにとゝ浮び涙くる

日記のこのさ出し

槇山人

○悲しさよ嬉し寂しくバラダイス切に我昨夜の夢に遊べり

○苦しきがなかになか〳〵樂しみの處見出でぬよべのうたげに

○雪見れば木曾べ〳〵と歌ふべく心のせらるあはれ夕暮

○山も木も水さく木さく冬に入り心つらねて雪のかづきを

○晝過ぎぬ思ふ間言ふ間に月上り木曾の谷あひ寒さまされり

○いとほしく薄き夕の日の光雪消の村の歌よむ家に

○山あひの小さき村の照曇雪と夕陽のかたみに訪ね

○若き血のもゆる外に雪の村左義長すると子らはさやげり

七宮先生謝恩金領收報告

金壹圓　丸山林一君
金貳圓　宮澤末雄君
金壹圓　平田久良治君
金貳圓五拾錢　市岡正茂君
金貳圓　種倉隨藏君
金壹圓　小松義三君
金壹圓五拾錢　原正次君
金壹圓五拾錢　加藤七藏君
金壹圓　千村彌之助君
金壹圓　千村吉雄君
金貳圓　前田正義君
金貳圓　高野薫見君
金貳圓　樋口德一君
金貳圓　長谷川毅君
金貳圓　小松良輔君
金貳圓　北川登君
前號金貳圓安江悅太郎君トアルハ金貳圓安江悅次郎君ノ誤ニ付茲ニ訂正ス

校友代領收報告

一金壹圓　北川春君　一金壹圓　廣井昇君
一金壹圓五拾錢　原正次君

林業いろは歌留多　正誤

つ　盡きせぬ寶山にあり
え　枝葉茂りて山も肥え
め　瞑目しても木の天地
み　源繁く未清し
ひ　火の元用心山の火事
ん　雲畑たなびく峯の森